

犯罪被害者等施策講演会（第12回）

日時：平成31年3月12日14時～15時30分

場所：警察総合庁舎7階 大会議室

演題：終着駅のないレールを走り…～あれから20年を過ぎて～

講師：高松 由美子 氏（公益社団法人ひょうご被害者支援センター監事）



初めまして、兵庫県から来ました高松由美子です。今日はよろしくお願いします。

『生命のメッセージ展』をどこかで見たことあると思うのですがけれども、改めて息子は亡くなったときの身長が180センチ、体重は85キロありました。それから、これは最後の写真、高校1年に入ってすぐの生徒手帳の写真です。それから、手紙、そして、この下にあれから20年、少年法で私たちは記事も書いてもらえませんでした。そういう中でマスコミが自分の使命だと言って書いてくださいました。それに対して、私は、この小さいのですけれど、もう一つの資料もあるのでありますが、皆さんにお手元にある資料の中の 하나가1997年の当時のまま、全く今も変えていません。片づけていません。カレンダーもそのまま

です。そういうのを見ていただきたいと思って、皆さんに配っています。

それから、事件と私たちのやっていたことです。そして、全く履かないであろう靴があります。これは30センチの靴です。本当は息子に靴を買ってあげたかったんだけど、磨耗してしまって、息子の靴はありません。男の子3人です。その三男がこの子よりも3センチか5センチ高く185センチで、130キロの三男がいます。その子の靴は、30センチで、兄ちゃんにやると言っていて、このように置いています。もしよろしかったら、息子の心の叫びを聞いていただきたいと思います。

ここにハートがあります。私もハートを持っています。そして、声なき声として新しくメッセンジャーとして生まれ変わりました。

本日は、犯罪被害者等施策の講演を私のような者に声をかけていただき、本当にありがとうございます。大勢の方に集まっていただき、感謝しています。私でいいのかなと思いつつながら、兵庫県から来ました。そのときに不安になったので、息子にも行こうかと言って、息子を連れて来ました。私が今、活動しているのは、こんな悲しいことは私たちの家族だけでいいと思う願いを込めて、息子を誕生させました。

当時、私は、ニュースや新聞記事を見ても他人事でした。私の事件の3か月前には神戸連続殺傷事件もありました。そのときは、息子は生きていました。私自身は、かわいそうに、あんなことするなんて、門に首置くななんて、ひどいことをする少年もいるということをお話しました。その3か月後に私の事件です。誰が想像しますか。1人ではなく10人という集団に殺されたのです。そういう中で犯罪被害者になって、誰もが明日は我が身であるということをお自身が知りました。そして、そんな社会になっていることを身近の人、少年たち、子供たち、刑務所、少年院、いろんなところで話をし、こんな世の中になっていること、また、事件の怖さを伝えたいと思って、私は、日々そちらのほうでも話をするようになりました。

もう一つは、人の手が凶器であるということです。私の息子は殴る、蹴る、頭が陥没したのでもないし、ナイフで刺されたのでもない。イライラした。誰か殴りたい。あいつ、生意気になったから、ちょっとこれぐらいと、安易な考えで殴る、蹴る。その中でちょっとこれぐらいがエスカレートしてやめることも、止めることもなく、二度と戻らぬ重大事件を起こして命を奪ってしまいました。どんな理由があってもしてはいけないこと、それは返すことも、戻すこともできない、自分の命をあげることもできない。そういう命を大切に、命を奪わないこと。普通の生活が私は当たり前、このまま続くだろうと思っていた矢先の出来事です。心構えもありません。準備もありません。ある日突然に息子を奪われ、息子の未来も、家族の未来も、生きる気力さえ奪われてしまいます。

ある御遺族が言われました。何も経験のない者は、夢も希望もあって、顔を上げて上を向き、未来に向かって頑張ろうとしている。しかし、遺族は、家族の形も変わっている。

下を向いている。でも、頑張ろう。今日も1日頑張ろう。また、新たな人生を一步ずつ進む、遺族も回復をしなければいけないのです。だからこそ、私も、息子の分まで生き続け、この事件を言い続けようと思いました。

そして、私の心の中に2つの時間軸を抱えたことになりました。1つは、皆さんと毎日経過する時間軸です。残された弟たちが兄を超えるときに、この子は本当に16歳になるだろうか、もしかしたら、17歳にならないのではないかと、そういう不安にもなりました。

もっとつらいのが、息子の命日は9月です。命日が近づくと嫌な気分になりました。その後、生きていた15歳より、その亡くなった年数を超えるときに改めて事件を憎み、息子を返してほしい。この家族の笑顔も返してほしい。そういう気持ちに改めてなりました。もう一つの時間軸は、事件でとまってしまった時間です。それを今から少しずつひもをといて話をしたいと思います。

息子の話をしたいと思います。息子は決して死にたくなかったのです。夢も希望もあり、高松家8人の大家族の中で、男の子3人は本当に弟の面倒もよく見ていました。また、祖父母、曾祖父、大家族の中でお年寄りにも優しくかったです。本当に明るく、頼もしくしていました。そして、私たちは、田んぼを所有していて、1丁3反ある田んぼを小さいときから、長靴を履いて、いつも田んぼの中で遊んでいました。本来は砂場で遊ぶのに、田んぼです。かわいそうだなと思っていたけれど、それが3人の一番楽しいときであったみたいです。だから、農業をやっているときに、本当に笑顔で、また、自分の敷地内ですけども、トラクターとか、田植機とか、そういうのも必ず3人でトラクターの周りをうろうろしていました。今日も私は、息子はいないけど、5時に起きて、キャベツをとって、出荷場に行ってから、来ました。そういうとき本当に頼もしいことばかりを私は夢見ていました。

その後、あることがきっかけで、中1の3学期から学校に行っていません。言葉でいう非行少年です。それは、2つほど理由があって、自分は肩があるので、野球の背番号はもらえると自信を持っていましたが、練習もあまりしなくなったときに、背番号がもらえなくて、やけになったことです。

もう一つは、中1のときに新しい自転車を買いました。その自転車がある駅に置いていたときに盗られてしまいました。私は自転車を盗られたことで叱りました。ただ、帰る際にバスのお金を持っていないので、乗り捨ててあるような自転車に乗って帰ってきました。そのときは盗られたことばかりを叱るので、息子にとっては、その乗り捨ててあるような自転車ですけども、誰かが乗っている自転車に乗って帰ってきたことを反省しているのに、お母さんは、人の物を盗んでも叱らないという気持ちになったのか、原因はわかりませんが、そこから坂道を転がるように、加害者の少年と夜遊びをするようになりました。ピアスをする、シンナー吸う。私のところでは、トラクターを運転させているので、バイクの免許がなくても乗れてしまう。本当に、どんどん坂道を転がるように変わっていきま

した。

また、親の顔を見るのも嫌な時期になっていると思って、私たちが部屋にいと、必ず知らん顔をして自分の部屋に行くようになりました。

非行に入って、私は、どうしていいかわからない。寝ているときに息子の部屋に包丁を持って行って殺そうと思ったことが何回もありました。その度に主人に止められて、その後は、児童相談所とか、教育委員とか、いろんなところに連れて行ったり、家族が共通するもの、スキーとか、ボーリングとか、いろんなものを楽しめるように一生懸命考えました。それが日々続くことで、私自身は、この子が戻るだろう、戻ってほしい、更生してほしいという気持ちでした。

しかし、本当に戻らなくて、学校に行かないのではないかと思ったとき、中3で高校の進路を決めるときに、「お母さん、こんな学校がある。僕が行ったら、もしかしたら行けるかもしれない」と言って、自分でその学校を選んで、その学校を自分が受けて、そして、見事に合格しました。これが生徒手帳の写真の播磨農業高校で、寮もあるところですけども、そこに自分で受けて、合格したことによって自信はついたようで、私自身は、これで高松家も安泰と思いました。本当に入学してからは加害者とも付き合いもなく、息子は笑顔が出て、その喜びもつかの間、命が奪われた。もうそのときには、私自身は体が震えました。やり直しができると思っていたのに、その喜びの矢先の出来事です。なぜそういう事件になったのかは、私自身はわかりません。

地域では、あの子が非行に入ったから殺されたとか、非行から抜けると殺されるという嫌なうわさになり、私自身は本当にショックを受けました。せっかく高校に行って更生しているのに、生意気だと。私は本当に悔しい思いをしました。その後、私自身が思ったことは、子供を育てるときに叱ることはあります。加害者にならないように、人に迷惑をかけないようにと話をしますが、被害者になる、15歳で殺されるといって子育てをする人があるのでしょうか。私がよく耳にするのは、事件を起こした家庭は大変と聞いていましたが、それ以上に犯罪被害者はもっと大変で、社会の目、人の目、犯罪に遭ったというだけで信頼も信用もなくなってしまいました。もう地域では孤立感、絶望感、不信感、もうそれ以上に苦しみました。いなくなった息子の良さばかりが思い出され、私は全く家から出ることができませんでした。そういう中で、私自身は息子の部屋を整理することができず、カレンダーもそのまま、ごみ箱のごみでさえ遺品になっています。

事件の内容を少し話したいと思います。事件は、3か月前に神戸連続殺傷事件があったとき、息子は高校へ行って明るい顔になって、こんな事件を起こす人がいるという話をしていました。その3か月後に予想なく、予測もなく、思いもよらず、こんな不幸が我が息子に起こりました。誰が想像しますか。私自身も一瞬で暗闇、そして、夢遊病者みたいになりました。1人ではなく、10人という集団で無抵抗な息子に対して殴る、蹴る、それ以上の暴行です。どんな思いで殴られていたのか。私は人から殴られたことはありません。

主人からも殴られたことがないので、殴られて命が奪われるということが私には理解できません。今でもそうです。

息子は、私たちのいるあかりが見えたのに、連れ戻され、暴行が始まった。それはもう殺意しかない。裸にされて、最後には火のついたばこを耳に刺してカラオケに行った者、それから、そのままほったまま、自分の家に帰った者、その光景を思うと、私自身は本当に息子の気持ちをどう考えていいのか、今でもわかりません。一発殴られて我慢して、また一発我慢して、そういう気持ちだったのかとか、私たちの家族の顔が浮かんじらうかとか、お父さん、お母さんと思ったのかとか、私自身は全くわかりません。

あのとき、あの夜、もっと部屋に行って、私が探していればよかった。もし寮にいたら、こんな目に遭っていないのではないかと。そういう思いがあつて、私自身は、助けることができなかつたという無力感で心が沈んで、申し訳ないといつも思っています。だからこそ、当時も、21年たった今でも息子を返せ、私たちの人生も笑顔も生き方までを事件以来、身勝手な加害者のために変えられてしまったこと、本当に悔しく思います。私自身は、その息子が帰るまで、返してもらうまで、私は言い続けるしかない、そう思っています。

最後に「お休み」と言ったのが最後の姿です。翌日の朝、畑仕事をしているときに、救急車の音を聞きました。それに息子が乗っているなんて、私たちは想像つきません。そして、9時ごろに警察の聞き込みでその神社で若い男性がと言われたとき、息子がいないことを私は察知して嫌な胸騒ぎがしました。そして、机の上に貯金箱がわりにしていた瓶がスローモーションのようにテーブルから床に落ちました。それだけは覚えています。その後は何も覚えていないのです。そこが、ぼっかり穴があいています。頭の中は真っ白です。その後、主人は病院、私は警察で事情聴取の後、私はそんな違う人、私の息子じゃないと思いつつ、病院に駆けつけました。

目にした光景は、自分の息子とは思えないほど真っ黒でパンパン腫れ上がっていました。足がすくんで、息子のところに近寄ることができませんでした。でも、息子の聡至でした。なぜ一夜にしてこんな姿になったのか。耳の形もありません。意識もありません。大きな体、180センチの85キロ、それがすごく腫れてベッドから落ちそうぐらいでした。ものすごい暴行とものすごい恐怖感が伝わりました。医師にも、できる限りのことをしてほしいとお願いしました。事件から9日後に、捕まったということ、一人だけまず捕まったときに、息子は返事のように一筋の涙を流しました。それが最後の息子との会話になってしまいました。

9日間、私自身、息子と話をしながら、気がついてほしい。また、主人は、看病しているときに、必ず涙を流すのは、息子のひげを剃るときです。そのひげが伸びてくると、それぐらい自分でひげを剃れと言いつつ、涙を流しながら、ひげを剃ってあげていたのが今でも本当につらい。私の家では、男ばかりですけども、ひげ剃りの音は聞きません。かみそりでひげを剃っているみたいです。私たちは、それが看病している中で、大変つらかったと思っているし、友達との映画の約束もしていました。その当時はポケベルです。

ポケベルを探してもらって、新しく買っていると言ったけれども、池の水も全部抜きましたが、結局見つからなかった。そういう本当にいろんなことしてもらいました。

看病しているときに何げなく待合所で見したのは、ダイアナ妃が交通事故で亡くなったというニュースでした。それだけを何げなく見たときに覚えています。そして、9月1日が命日になってしまいました。

事件後はもう一変してしまって、悲しみと苦しみのどん底です。谷底に突き落とされたみたいでした。暗闇の中で何をしているのか。食べることも、寝ることも私は忘れて、夢遊病者みたいでした。生活の能力も低下しています。長年私は主婦をしていましたが、御飯を炊いたり、それから、おかずを作ると、辛かったり、甘かったり、全然食べるものができなくなりました。一つ覚えているのは、カレー用の具を、やっとカレーをつくってほしいというのを子供たちが言って、それを買い物に行こうとしたときに、道を間違えたり、信号ももう少しで、赤信号を通過してしまったりと、思い出の道を本当に当時は走れなかった。そういう中でカレー用の具を買い物に行きました。でも、買い物の中はおやつばかり、それを見て、主人も子供も、また弁当かと言われたとき、本当につらかったです。

そういう中でも、私たちを支えていただいた方も多くおられます。それは高校の担任の先生でした。担任の先生は、片道1時間半ある病院まで、僕の生徒だからと言って、8月の24日から9月1日までの一番暑いときに、毎日来ていただき、「お母さん、御飯食べた？」「聡至君をちょっと見舞ってくる。」と言って、いつも声をかけていただき、いつも私たちに笑顔をいただきました。その担任の先生に支えられたことは、本当に嬉しかったし、励まされたと、感謝しています。

その後、20年間、命日には必ず担任の先生が来ていただきました。それに何も恩返しはしていません。私自身は生活面の中で一番大変だったのは、子供たちの、残された子供たちのお弁当でした。お弁当をつくるのが大変でした。それを近所の人につくっていただいたこともありました。

一番混乱したのが、警察官が司法解剖すると言われたときでした。私は、頭が陥没したのでもないし、殴られても、全く傷はない。ただ、腫れているだけだったのに、それを切り刻むのか。私は、してほしくないと思わず言いたくなりました。その後、警察官と医師が言ったのは、死亡の直接的な原因が何かわからない。だから、司法解剖しなければ、亡くなったことの内容が書けないというのを警察の人が医師と話をしていました。私は、そのときに何で亡くなっていることがわからないのか、そう思うと、仕方なく、調べてくださいということをお願いしながら、司法解剖に出しました。それは、一人が一発殴れば10発、一人が10発殴れば100発というように、一人で10倍の痛さを、10倍の恐怖を受けたのだなというのを感じました。

息子は、人の手が凶器になったことで、命を奪われた。本当に手足は大切です。人も助けられます。でも、その使い道を間違えれば凶器になります。そして、殴りたいと言って

いた口も凶器になります。なるべくそういう中で、本当は一発殴れば10発なのにといい気持ちもあったけど、息子がそれだけ耐えたんだというのを私自身は忘れないようにしようと思いました。

葬儀では、他人のお葬式のように感じました。なぜか涙も出ないのです。そして、バスで何台も来ている同級生の友達に、私はお礼を言うのにほほ笑んでしまいました。それを見た御近所の人が、子供が殺されているのに、子供のお葬式なのに強いのですねとか、冷たい人かなとか、本当に多くの人にそういう言葉を言われました。私自身は、コントロールができず、どういう表情をしていいのかわからなかった。もっと泣き崩れていたほうがよかったのかなと思ったけど、私は、夫婦で息子の最期、これ以上息子のことはできない。無事に終わるまで、3時間少し、息子に恥をかかさないようにと思って、私は一生懸命でしたが、世間は冷たかったです。

事件前は夫婦げんかなんかしたことなかったのに、その後いろいろなことで夫婦げんかをする事になり、私はもう離婚しなくてはいけないうか、あなたと結婚してこういう目に遭ったのではないかとか、本当にもう言うてはいけないうことまで、私自身は主人と本当に言い合いになりました。また、弟、中2と三男は小5です。その子供たちの目標であるお兄ちゃんがいなくなったことで、息子たちも本当に学校へ行くのも嫌だということがありました。また、元気がないから、もうあまり学校には、行きたくないと何回も言うことがありました。

そういう中で、私の二男はいじめも遭ったし、生まれつき少し足が悪かった。歩行がすごく弱かったのです。小1から中2までマラソンはいつも130人でびりでした。中3のとき、事件後にこの家族を僕が守ろうと思って、練習をしたそうです。そして、マラソン大会で40番をとってきました。普通は今までびりだったら、褒めなくてはいけないうのです。そうであるのに褒めることができなかつた。それが今でも、僕が一生懸命しても、お母さんはやっぱり兄ちゃんのことしか思っていないと言われたことありました。弟たちは弟たちなりに一生懸命私たちに笑顔を向けることをしてもらったのに、私自身ができなかつたことは、申し訳なかつたというのを今でも思うし、時々私が叱ろうとしたら、兄ちゃんはいいな、叱られないからと言われたときに、私は弟たちに無理なことをしていると思いました。

そして、私は、もう絶対に加害者を許さない、あだ討ちがしたい。そう思ったときに、今ではできません。それが裁判です。その裁判を、この小さくなっているのですけれども、真ん中の、皆さんから見て左側のところに裁判を、民事訴訟ですけれどもしました。そして、その横に小さく、懲罰的損害賠償というのを盛り込みました。これは、私たちの弁護士の一人が暴力団の弁護人であつて、普通は一般の人を暴力団が何かしたときに、こういう懲罰的損害賠償というのをつけるのですけれども、私は、10対1、10分の1。それでもよかつたら、こういうものを入れてほしい。できるだろうかと思ひながら、私たちは、10対1でそれを懲罰的損害賠償というのをしたいと思って言ひました。その結果、認められなかつたけれども、マスコミも、10人だつたらそうですよねというのを言われたときに、私はして

よかったと思いました。

地裁では、親の責任はありません。少年にしかありません。そして、高裁に上がりました。そこで親の責任を認めてもらいました。そのとき、私がしたのは、いつも町で加害者、今でもそうですけども、会います。そのときに「人殺し」と言えないのです。町で会って楽しそうに家族でいる、その子供たちの、少年が親になっている、結婚した奥さんとか、子供さんに「あんたのお父ちゃんは、こうだ」と言うのだろうかと思うときもありました。でも、そういうわけにはいきません。それをある事件の被害者遺族が思わず言ってしまうと、警察に捕まった人もいました。それを聞いて、私はぐっと抑えたのですけども、それぐらい毎日、今でも同じ地域に住んでいます。少年事件の場合は、どうしても同じ地域であることがいつもつらく思って、本当は家を売って、どこか違う町に行きたいと思うときもあります。でも、私の家は200年も続く農家の本家です。そういうのを売ってまでできないので、仕方なく黙っているしかない。

そのときに民事訴訟で直接質問がしたいということを私は弁護士に言いました。認められるかどうかはわからないと言われました。たった3つの話です。「暴行の途中でなぜやめられなかったのか」とか、「これほどの暴力を、聡至はあなたに何をしましたか。」そして、最後に、「裸のまま現場に置かずに、なぜ救急車を呼んでくれなかったのか。」たった3つです。この質問ができたことは、私は本当に良かったと思っています。弁護士は、そのときに質問ができなくても、質問できても答えは気にしなくてもよいと言われました。質問することに意味があるという説明は受けたけど、私たちは、質問したら、答えるだろうと期待もしました。でも、答えはわかりません。覚えていません。「知りません。」「死ぬとは思っていなかった。」それを言われたときは、先生が心構えに期待はするなと言われたのが、これだなと思った。だからこそ、直接質問ができたことが本当に私自身はよかったと、私は思っています。

その後、刑事裁判で直接質問を遺族ができるというのは、本当に一歩進める、裁判の中で一歩進めることに、気持ちが進むことなんです。だから、必ず察してもらいたい、察してあげてほしい。それを私が経験したので、刑事裁判でも察してほしいと思いました。

地裁では、親の責任は認められなかった。そして、高裁にいきました。また、新たなお金も必要です。でも、全面勝訴で認められました。身を挺して阻止すべしという判決をもらいました。親の責任がとれました。親の責任をとるのは本当に大変でした。でも、これをしていただいたことは、ほかの遺族やら、被害者、そして、支援者、マスコミの多くの方に関わってもらうことで、本当にいろんな勉強をし、出会いもあり、つながりもあり、また、支援をしてもらった。人によって助けられ、人の出会いは本当に大切です。人に息子を奪われたのはありますが、人によって助けられる、人を憎んでは生きられない。それを私が教えてもらい、今後は本当に憎しみではなくて、感謝として動ける私になりたい、そう思って、事件後、いろんな人に関わるようになりました。

事件からいろんな人に関わってもらいました。初めの弁護士とはうまくいなくて、その後マスコミから弁護士を紹介してもらって、その弁護士が言ったのは、「お金を取るのは僕らの仕事。でも、もう一つある。それは心をとる弁護士なんだ」というのを教えていただいて、そこから私は、このような弁護士もいるのだということを教えてもらいました。

警察のことで私自身が心に残っていることを伝えたいと思います。今はもう20年も前で、いろいろもう変わってきていることもあると思いますが、当時は、地元の対応は本当に良い方もいました。でも、ほとんどが、「少年事件か、仲間割れだろう」とか、「3か月前の事件、知っとるやろ。その事件でな、大変やねん、僕らは」とか言われました。神戸事件と違う。稲美町事件ですと言いたかった。けれども、少年法があって教えられないし、「もう少年事件ばかりや」と何か愚痴のように言われたときは、大変ショックでした。

事情聴取は、机と灰皿のある、本当に資料のいっぱい並んでいるようなところでした。そういう中で私が加害者なのか、被害者なのかという気持ちになったこともありました。

もう一つが、一番悔しい思いをしたのは、亡くなって、そのときに離れなさい、触らないでくださいと警察の人に言われました。何で触ってはいけないのか。亡くなって、「何で抱かれへん」と言うたときに、司法解剖に出すからと言われました。私は、本当にあの子を触りたかった。でも、それは無理なことでした。そして、寝袋のような袋に入れたけれども、大き過ぎてファスナーを閉じることができない。二人の担当の人が一生懸命無理やりに詰めていました。その後、ストレッチャーに乗せ、青いトラックに本当に物のようにごろんと転ばしたことが本当に悔しい思いでしたし、殴られて、蹴られているのと思うたこともありました。司法解剖は仕方ないと思いながら受けました。

もう一つ思ったのが、私には、遺品がありません。なぜ遺品がないのか。それは、関西では「ほかします」とかいうことが、物を「ほかす」という言葉があります。そして、夫婦で何を言われたかわからないけれども、最後に「ほかします」と言われた。でも、私たちは「保管します」に聞こえました。そして、判子を押しなさい。いろんな判子がいっぱいありました。その中の一つが遺品を保管するという意味だろうと思って、判子を押しました。そして、1年後に保管しているのだったらと思い、もらいに行くと、そんなことはないと言われたときに、「えっ」と思いました。いろんな人に聞くと、遺品は箱に詰めて自宅に送った人もいるし、わざわざ持ってきた人もいるというのも聞いて、私たちは、本当にあのとき、保管していると思って1年間、温めてきたのに、これは何だと思ったときに、本当に説明不足でもう少し丁寧にしてほしかったと感じました。今では多分違うと思います。

それから神戸事件は加害者が1人、そして、被害者が多人数です。逆に、私の場合は、加害者が10人、被害者が1人です。この差によって小さな事件が、また、報道されている、報道されていないで大きい事件、小さい事件と決められたのかなと思いました。私は、マスコミがその事件を大きいとか、小さいとかいうのではないかなといつも思っていたけれ

ども、警察官も本当にそのときに、後に知ったのですが、神戸事件は自宅で犯給法とか、担当の警察官が生活支援を行ったということを聞きました。私は、私自身がいろんなところに相談に行き、いろんなことを教えてもらい、給付金でも、京都まで、大谷先生のところまで自分の小さい事件ですけども、記事が書いてあるのを持って行って、犯給法でこういうのを書かれているんですけども、「私とこはだめなんですか。」と聞いたら、「これは大丈夫。出さない。」と言われて、県警本部にお願いしに行き、地元に行ったときは、出したことがないからと言われて、また、県警本部に行き、そして、やっと犯給法で給付金ももらいました。

それから、兵庫県警は10か所の署がありました。そこに加害者が全員いました。50何か所あるんですけども、その中の10か所に加害者がいました。そして、ポケベルがないときに、何人かの人ポケベルはどこにあるのですか。ポケベルはどこで買ったのですかと言われたときに、さっきの人に伝えましたと言うと、さっきの人は知らないで、今からまた言ってくださいと。何度も何度も同じことを、何度も何度も聴取され、そして、私たちは、本当に自分の家族だったらどう思うのだろう、もう息子が本当に生きる気力もなくなってきている中で、私自身看病を一生懸命しているのに、なぜそういうことを連携しないのか。なぜ私たちに何度も聞くのか。それが私たちには本当に苦しく思ったし、そういう中でも、助けてもらった方もいます。

こういう中で、警察官の本当に、今だから話せると思うのですけれども、全員の名前を書いた調書がテーブルの上に置いてあって、「お茶入れてくるわ。」と言って、外に出ました。今、写すのだと思ったこともあったり、それから、ある警察官は、「僕の息子がこういうのになったら、これはつらいな。でも、警察は、法律がなかったら、動けない。」と言われたときに、そうですかと言いながらも、病院の看病しているところに加害者の連れが来たときに、来たと言ってすぐ病院から探してくれました。でも、捕まらなかった。その後、私が、息子も非行していたので、ここの場所に、マンションに息子が行ったんちゃうか、ここは息子がと言うたときに、やっぱり仲間割れやないかと言われたときに、私が言ったことがその後、調書で見ると、実際にそこで汚れたものを着がえたり、そこに行っていました。そのときに、そのときは、私は言ってくれへんのやろと思っていたのに、調書に書いてあることで、本当に捕まるのが早かったというのは、お母さんが非行のときの少年たちを知っていたからだというのを言われて、あー、息子が悪いことをしているけども、でも、その中で私が息子をどうするのかというのを向き合ったときにしていたことが、資料が役に立ったと思ったこともありました。

それから、高校の先生は、先ほど言いました。20年間、私たちを支えていただきました。大学の先生は、ある事件から、今は京都の産業大学に准教授でおられるんですけども、事件後、いろんなことを教えてもらい、裁判はこうであった、そして、裁判の裁判ニュース、高松裁判ニュースをつくっていただいて、それを多くの人に傍聴するときに渡したてくれました。私たちは遺影を持ち込めない。そのときにみんなに写真を持ってもらおうと、小

さいですけども、写真をつくってくれたり、いろんなことを先生はしてくれました。それに対しては、本当に感謝しています。

それから、救命隊の方です。二男の高校の保護者が救命隊の人でした。保護者の保護者会のときに、そのお父さんが、あの事件と言われて、そうですと言ったときに、「僕が運びました。あの救急車の中では頑張っていましたよ、息子さんは。」と言われて、お礼を言いました。だから、本当に偶然なんですけども、息子に関わった人に助けてもらいました。

また、体験者の自助グループです。あすの会は、私は本当に支えになったと思っています。岡村先生には感謝をしています。六甲友の会という、ひょうご被害者支援センターにかかわる中で、私は六甲友の会をつくりたいと思いました。

親類は、ちょうど三男が小学校の5年生で、自然学校でした。そのとき、ちょうど9月の3日から行くことになっていました。3日がお葬式でした。近所の人三男を、「もしよかったら、お葬式済んだら、自然学校、行かせては」と言われました。でも、用意をしません。また、どうして、こんな事件が起きているのに、弟を行かせるのはと思ったときに、私たちが用意してあげよと言われて、そのまま三男は葬式終わってから自然学校に行きました。そのときは申し訳ないなと思いました。三男が帰ってきたときに、お母さん、楽しかったと言ったときに、残された子供たちの生活もある、その生活を我慢させてはいけない、そう思ったことが私には助かった、近所の人には迷惑をかけたけれど、本当に行かせてよかったと思いました。それが私の中での近所の人のおかげでした。

それから、ひょうご被害者支援センターです。これは本当に、当時は大阪アドボカシーしかなくて、傍聴をしていただきましたが、その後、兵庫にもこういうセンターをつくらうと声をかけていただき、そういう中で、被害者遺族である私が役員になりまして、そして、ひょうご被害者支援センターができました。これは本当に47都道府県、北海道は2つですけども、48ある中で被害者遺族が入ったセンターというのは初めてでした。そういう全国でいろんな関わりに私は参加させてもらいました。

それから、兵庫には犯罪被害者の自助グループである六甲友の会があり、私は世話人をしています。犯罪に遭った者が、癒される場、心の吐き出しする場、痛みがわかる安心の場、情報の場、また、自分の学んだことを伝え返す場として参加しています。臨床心理の羽下先生、富永先生とマスコミがコーディネーターとして参加し、聞いていただいています。また、ひょうご被害者支援センターは、記録をとります。私たちはしゃべりたいので、その記録を出すわけにはいかないのですけども、車座でいろんなことをしゃべります。未解決事件の方もおられます。この未解決事件の方は、ビラ配りをしました。高校生の子供さんは、夜に10時ごろにちょっと友達と会ってくると言って亡くなった。近所の方は、夜、行かせるのが間違いと言われたけれど、高校生にもなって、夜ちょっと友達と会ってくると言っていることを止められますか。そういうのをやっぱり気になると、私自身本当にいろんな人に、こういう未解決事件の人も、やっぱり時効がなくなる、撤廃してからは、こういうのを必ず言って、どこかに加害者がいるのではないか。警察の人は犯人を逮捕し

てもらいたい。そこからが被害者が一歩進むと思います。いろんな全国にも未解決事件の人はおられます。そういう未解決事件の人は、本当に加害者を捕まえてもらう、そういうことからやってほしいと思います。

私たちのグループは、検察庁との勉強会があります。それは、自分の事件を担当だった検察官が神戸に帰ってきて、そして、今、私たちの前で「当時はこんなんやったねえとか、あんなんやったねえ」とか、本当に偶然なのですけども、こういう六甲友の会に入りたいと言って、私たちの支援をしてもらっています。そういう私たちは130回ぐらいしていますが、年間を通じてみんなにいろんなことの話をし、背中を押されて一歩進むということを私は今もやっています。

手記「おもかげ」を私たちは作成しました。この「おもかげ」に対しては、私たちは誰かに伝えたいと思っています。私は、「終着駅のないレールを走り…」です。終着駅ありません。定年も退職もありません。一生遺族なのです。遺族で生きなくてはいけないのです。私が息子のところへ行くとき初めてとまるんだなと思うときがあります。やめたいときもありました。でも、息子が本当に悔しい思いをして亡くなっているのだから、私が苦しい思いをしているのは、本当にごくわずかです。息子の代弁を私がしています。

最後になりました。私は、犯罪被害者になって一番つらいのは息子だと思いつつも、犯罪をなくさなくてはいけないという気持ちです。最初に言いました。私自身は本当に息子がこれで最後になるようにと思って、願って、『生命のメッセージ展』に参加しました。悲しいけれど、いろいろ次々と事件が起こっています。それが本当に悔しい思いをします。そういう中で、私たちはやはり元の生活に戻りたい。とめどなく支援もしてもらいたいし、市町村にやっぱり犯罪被害者条例をつくってもらいたい。いろんな人がいろんな各地、窓口をつくり、温かく連携をとって、遺族が動かなくてもいろんなアドバイスをもらう。そういう全国にしていきたい。そして、遺族が一歩進める、そういうセンターになって、また、そういう中で私自身はいろんな人と会うことで一歩進めるのではないかなと思います。

私が今、田んぼをしている、その背中に現場があります。とてもつらいです。田んぼをしても、後ろは見たくないときもあります。でも、ここが私の中でのこの一つの生活になっています。事件現場だった神社でのお祭りには加害者も来ます。でも、私たちは行けません。

そういう場があるというのを知ってもらいたいし、息子のカレンダーは、いつ片づけていいのかわからないし、ベッドもこのまま、息子が、帰ってくるのではないかなとか、息子、弟たちが時々お兄ちゃんの部屋に行っています。もしかしたら、心の叫びを息子たちがお兄ちゃんに相談しに行っているのかなと思って、私自身は片づけられずにこのまま置いています。これで本当にいいのかどうかわかりません。まとまりのない話をしましたけども、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。(拍手)